

吃音について理解をしてほしい

松江市立第三中学校 三年 三島優翔

みなさんは、「吃音症<sup>きつおんしょう</sup>」という言葉を知っていますか？吃音症とは、話を始めるときに最初の一言が詰まったり、同じ音を繰り返したりする言語障がいの一つです。世の中にはまだ理解されづらい一面を持っているため、笑われたり、からかわれたりすることも多く生きづらさを感じる人は多くいます。僕は今、その吃音と自分なりに上手く付き合っています。

僕が、僕自身のことを少しおかしいんじゃないかと感じたのは小学一年生のときに、音楽会のリハーサルをしたときです。僕の番が来るまでみんな順調に自分の台詞を言っていました。そして、僕の番が来て台詞を言おうとしました。ですが、言葉がなかなか出<sup>ども</sup>ず吃ってしまいました。周りの友達には僕のことを笑っていました。僕は、恥ずかしくて、泣きたくてどうしようもなく惨めな思いをしました。その日を境に、僕は授業中に当てられたり、発表することがとても苦痛でした。目に見えるような障がいを持っている人に対し、その人を笑い者にしたり、からかったりすれば、世の中から強く批判の声が上がるでしょう。しかし目に見えづらい障がいは、笑い者にされようが、からかわれようが、「無知」というバリエーションに守られ、まるで「当たり前のことをできない人がおかしい」かのように世の中の「常識」に押しつぶされるのです。

僕は人と話すときに、

「今、この言葉を言ったら吃るな」

と分かるので、そういうときは言いやすい言葉に変換します。例えば、「投手」を「ピッチャー」に、「打撃」を「バッティング」にその時その時で自分の言いやすい言葉に変換しています。しかし、そういった変換が授業の号令や朝礼・終礼の司会などではできないときがあります。そういったときには「起立」、「気を付け」、「礼」などといった特定の言葉を使わないといけません。そういう時、僕は一度間を作ってから、2回息を吐いてから言うようにしています。すると、だいたい言葉をスムーズに言うことができます。ですが、普通に言葉を発するよりも少し時間がかかってしまいます。だから、人と会話したりしているときに変な間があくことがあり会話が滞ることもあります。他にも僕が苦手なのは、電話です。電話は面と向かって人と話すことができません。面と向かって話していれば、身振り手振りで吃ったとしてもごまかすことができます。ですが、電話では面と向かって人と話せないのが、吃ってしまったときに先程の「ごまかし」が効きません。どうしても自分の言いたい言葉が出ないときもあります。そうすると、自分が電話の相手に対し無視をしていると、相手に勘違いされるのではないかと不安になります。他にも、自己紹介や教科書の音読、人前で話す時などは、どうしても緊張してしまい普段よりも吃りやすくなります。僕の場合は、考えれば考えるほど、

「吃ってしまうんじゃないか。」

という考えに至ってしまうため、あまり深く考えないようにしています。このように、吃音症への考え方、対処の仕方は人それぞれだと、僕は思います。だから、自分なりのやり方を見つけることが大事だと思います。

今回の僕の主張をきっかけに、吃音症というものについて詳しく知ってもらい、理解してもらえると嬉しいです。みなさんの中にも僕と同じように、吃音症に悩んでいる人がいるかもしれません。吃音症の人は、人口の約1%いると言われ、日本でいうと120万人いると推定されています。だから、自分だけじゃないと思ってください。そう思うと心が軽くなります。「知る」ことで救われる「助け合い」がもしあるのなら、この主張を通じて、「目に見えない障がい」や「吃音」の大変さを伝えたいと思います。それによって、結果的に「助け合い」が生まれ、「吃音のある人」や、「目に見えない障がいがある人」にとって、生きやすい社会になることを願っています。